NAKED EYES.

BY KOUICHIRO GOSHO

CLIMBAR

小谷隆一

【プロフィール】 1924年京都市生まれ。50年東京大学政治学科卒業。66年伊勢藤グループの代表取締役に就任。79年に組織を整理し、イセト紙工を設立。京都商工会議所副会頭他各種団体の役員を務めるほか登山家としても有名で、89年には中国コングール峰登頂に成功。

山で手にした決断力を武器に先人に学び、明日を拓く男。

平安建都1200年を盛り上げたいな、と日夜走りまわっているが、なんだか盛り上がりはいまひとつだ。おーい、みんな元気を出せよ、といつものことながら叫びたくなる。だが、種も蒔かずば花は咲かない。今はそんな時期なのかもしれない。それにしても、地道な努力が好きなヤツはいない、と思いきや、いたいたいました、大先輩が。イセト紙工の小谷氏。会社経営のかたわら数十年にも及ぶ登山歴の持ち主だ。登山とは、実に苛酷で地味なスポーツ。そこから生まれるものは、一体なんだろう?

山では、ほんの一歩が生死を分ける。

御所 長い山登り歴をおもちで、平成元年には中国のコングール登頂に成功されたそうですが、一口に言ってなんで山に登るんですか?

小谷 「そこに山があるから」というセリフは陳腐なものですが、同時に山に登る人間でなければわからない部分は多いかもしれない。とっかかりは、自然に恵まれた京都に育ったおかげなんでしょうね。旧制中学3年から大学時代まで山岳部に所属しましたが、苦労して歩いて行けば美しい景色に出会う、その連続です。

御所 「山男にゃ惚れるなよ」と歌の文句にもありますが、実際女性にはあまり縁がないんでしょうか?

小谷 汚い服装に安っぽい食事、こんなものが〈アウトドア・ライフ〉なんて言われだしたのは、ごく最近ですよ。山に登る女性は増えましたが、お互いにいつも危険を背負って歩いているのが実態ですね。

御所 たしかに登山には常に遭難の危険が伴うようですね。

小谷 北山でも比良でも、どこでも死ねます。ほんの一歩が生死を分けるわけで、いやが上にも慎重になりますが、準備と心構えだけですね。自然の猛威に耐える力なんて、そもそも人間にはないんですよ。大学時代、南アルプスで、大晦日に吹雪で閉じ込められたことがあって、いっしょに行った友人が一人亡くなり、やっとの思いで逃れた経験もありますよ。

御所 そうした場面では、その都度とっさの判断が必要なんでしょうね。判断には、動物的な

勘と蓄積された知識に裏打ちされたものの2種類あると思うのですが、山ではどっちの方が重要なんでしょう。

小谷　両方あると思います。不器用でも鋭い勘と豊富な知識をもったリーダーと歩くと、自分たち以外には自然しかないわけですよね。そんなときのコミュニケーションというのは非常に微妙だと思うんですが……。

紙の消費量は、一国の文化度を表わすか？

小谷　カラコルムに7273mのディラン山という当時未踏峰の山があり、10名でアタックしたことがあります。ドクターとして北杜夫さんが同行され、『白きたおやかな峰』に、その行動をそのまま書かれました。第一キャンプからトランシーバーで指示を与えるわけなんですが、7180mの地点で頂上が丸くドーム型の雲に覆われ、ガスがかかって何も見えない状態になったんです。

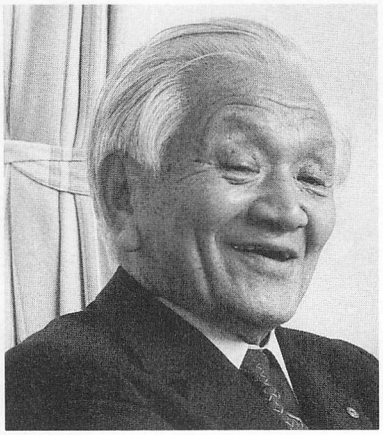
「止まれ。天候回復まで待て」

「あと150mだから行かせてください」

このやりとりは、テープに残っています。結局、翌朝5時になっても同じ状況で、初登頂を目の前にしながら、あきらめて引き返しました。人間の命のほうが大切だ、と判断したからです。

御所　ゴールの100m手前でも、断念すべきときは、する。すごい決断をしなきゃならないんですね。これにくらべて、経営上の決断はいかがでしょう。

小谷　うちの会社というのは140年間ずっと変革してきたと言えるかもしれません。初代の曾祖父はコヨリや水引、札紙や奉書紙を商う店として始め、祖父の時代が文庫紙（着物を包む紙）、親父は電線の絶縁のための被覆紙や巻取包装紙を製造するようになりました。昭和28年にコンピュータ用紙の日本第1号をつくり、その後ビジネスフォームの開発と製造に携わっています。



御所　事業そのものの定義見直しの連続ですと、絶対に危ない気が起こりませんね。

御所　決断力がもともとない人間でも、山を歩いていると養われるものなんですか？

小谷　そう思います。

御所　パーティーを組んで行動されていると、自分たち以外には自然しかないわけですよね。そんなときのコミュニケーションというのは非常に微妙だと思うんですが……。

小谷　カラコルムに7273mのディラン山という当時未踏峰の山があり、10名でアタックしたことがあります。ドクターとして北杜夫さんが同行され、『白きたおやかな峰』に、その行動をそのまま書かれました。第一キャンプからトランシーバーで指示を与えるわけなんですが、7180mの地点で頂上が丸くドーム型の雲に覆われ、ガスがかかって何も見えない状態になったんです。

「止まれ。天候回復まで待て」

「あと150mだから行かせてください」

このやりとりは、テープに残っています。結局、翌朝5時になっても同じ状況で、初登頂を目の前にしながら、あきらめて引き返しました。人間の命のほうが大切だ、と判断したからです。

御所　ゴールの100m手前でも、断念すべきときは、する。すごい決断をしなきゃならないんですね。これにくらべて、経営上の決断はいかがでしょう。

小谷　うちの会社というのは140年間ずっと変革してきたと言えるかもしれません。初代の曾祖父はコヨリや水引、札紙や奉書紙を商う店として始め、祖父の時代が文庫紙（着物を包む紙）、親父は電線の絶縁のための被覆紙や巻取包装紙を製造するようになりました。昭和28年にコンピュータ用紙の日本第1号をつくり、その後ビジネスフォームの開発と製造に携わっています。

御所　事業そのものの定義見直しの連続ですね。ビジネスフォームというのは、身近なもので言うとどんなものですか？

小谷　たとえば日航国際線の搭乗券、片隅に小さくISETOと入っています。また、自動車税の納付書やクロネコヤマトの宅急便の送り状。以前は全国の自動車免許証を扱っていたこともあります。たぶんいろいろなところで目にしておられると思いますよ。

御所　当初の大福帳から大きく変化しながらも、一貫して紙に関わってこられたんですね。これからの紙についてはどうお考えですか？

小谷　ペーパーレス時代の到来について、15年ほど前に真剣に考えました。結論は、おそらく2000年には紙の消費量の伸びはストップするだろうが決してなくならないということですね。紙は値段が安くて、どこでも読める。フロッピー・ディスクやマグネット・テープは、機械なしには読み取れませんからね。「紙の消費量が一国の文化度を表わす」と言われたのは昔のことで、再生紙の利用が環境問題の尖兵となっている状況もある。いちばん大事なのは、紙をあまり使わないようにすることじゃないかとも思います。コミック雑誌やダイレクト・メールなどは、紙のムダ使いであると同時に、知識のムダ使いでもある。ぼくらの時代には本ってもっともっと貴重品でしたからね。

ときには古いことを振り返って

御所　古紙ほどの値打ちもない、と言われんようにClub Fameもがんばらんといけませんね（笑）。次の時代の情報を乗せる器として紙に携わってこられた小谷さんとしては、この建都1200年を通じて21世紀の京都をデザインしていく方向について、どうお考えですか？

小谷　〈自然に近い都市〉の環境を基本にしたいですね。高層建築を建てて人口を増やすよりも、たとえば滋賀県との往来をスムーズにして琵琶湖を京都のレジャー地点とするとか、広域的な構想で町づくりを進めていくのがいいと思います。100年前の疏水のような偉大な事業ができず、芯となるものがない今の状況は気掛かりですが、「何を目指すか」については、もっと徹底的な議論がなされるべきでしょうね。

御所　建都1200年で数多くの催事が開かれているわりには、共通のテーマが見当たらない。これは、21世紀に向けての町づくりのシンボルがないからかもしれませんね。最後に、若者たちへのメッセージをお聞かせください。

小谷　1200年にまつわるイベント活動で自分の仕事だけではなく新しい考え方で集まっている人の中へ入っていくのはいいことですね。ただ、ときには古いことを振り返って、古い京都についても勉強してほしい。たとえば、江戸時代に京都で誕生した『町人考見録』や石門心学のような町場の思想、庶民の哲学ですね。京都は、江戸時代の倫理観と明治時代の開発がかみあわさることで、近代都市の要素を発展させてきました。先人たちに学びながら、未来に取り組むことが大事でしょうね。

〈御所氏へのメッセージ〉

御所光一郎「クラブフェイム」プロデューサー。

小谷隆一氏より

「『ワル』だけど、感じのいい人と井上三千子さんに紹介されましたが、その通りですな。いま、京都には若人の力を盛り立てる仕掛け人が必要です。がんばってください。」